

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：17101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720023

研究課題名(和文)『古史辨』派の発展的研究

研究課題名(英文)An Advanced Research on the School of "Critiques of Ancient History"

研究代表者

竹元 規人(TAKEMOTO, Norihito)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80452704

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、所謂「疑古派」の代表的学者である顧頡剛の学問に関し、従来の研究を発展させて次の4点の研究を行った。(1)顧が疑古史学を開始するうえで、いかなる史料を重んじたか。『詩経』を重視したことに着目した。(2)顧の疑古史学の着想が日本由来ではないかという疑問につき、白鳥庫吉・内藤湖南の著作と対照することで共通性に乏しいことを論じた。(3)顧の学問のルーツの一つであった崔述について、顧が注目した経緯につき明らかにした。(4)顧の古史研究の到達点というべき『尚書』研究について、後継者の劉起[金于]との比較も含め、その経緯と方法を論じた。

研究成果の概要(英文)：This research examined four issues on Gu Jiegang(顧頡剛)'s work. (1) To start with "doubt on ancient history"(疑古), what kind of material did Gu set a high value on? He thought "The Book of Odes(詩経)" was important as the earliest material. (2) Several scholars have assumed that Gu Jiegang was influenced by Japanese scholars such as Shiratori Kurakichi(白鳥庫吉) and Naito Konan(内藤湖南) in the process of presenting his thesis of "doubt on ancient history". Through detailed comparison between articles written by them, it is clear that there are few common features shared by the arguments of Gu and those of Shiratori and Naito. (3) Gu Jiegang developed his approach to ancient history from Cui Shu(崔述). I examined the process of Gu's attention on Cui Shu. (4) Gu Jiegang's work was culminated in his exhaustive research on "The Book of Document(尚書)". I discussed the methodology and details of the research including comparison between Gu and Liu Qiyu(劉起[金于]).

研究分野：中国哲学

キーワード：『古史辨』 疑古 顧頡剛 白鳥庫吉 内藤湖南 崔述 『尚書』 劉起[金于]

1. 研究開始当初の背景

『古史辨』は1926年に第一冊が刊行され、1941年までに七冊が刊行された、中国古代史研究論文集である。『古史辨』は、近代以前の文献における古代史記述の真实性を疑う「疑古」の立場が展開された論文集として知られ、『古史辨』派は「疑古派」と同様の意味で学派の名として用いられる。代表的学者としては顧頡剛(1893-1980)が挙げられる。そして同派は、ほぼ同時に勃興したマルクス主義史学と並び、中国における近代史学のなかで強い影響力を誇った。今日においても、疑古的発想はなお継承されている部分がある。

『古史辨』派・疑古派は、20世紀中国の有力な学派であったことから、近代中国思想史・史学史研究の対象となってきた。他方、『古史辨』・疑古は、その登場時から、近代以前の文献記載の信憑性をより高く評価する立場から強い批判に晒されてきた。1990年代以後、出土史料の大量出現等によって、その傾向が強まっている一方、2010年末に『顧頡剛全集』全62冊が中華書局から刊行され、顧の業績の全貌が明らかになったことから、再評価・再検討の機運も高まっている。

このように、『古史辨』及び関係人物は重要な研究対象として公認されている。しかしこれまでの研究は、疑古を高く評価するにせよ批判するにせよ、『古史辨』に何が書かれているか、顧頡剛ら主要人物が何を述べたかを主に論じるものであった。総じて、『古史辨』に即して『古史辨』を論じるに止まっておき、以下で述べる課題についての体系的な研究は存在していない。発展的な研究テーマに取り組むことで、『古史辨』・疑古派、顧頡剛研究を前進させるとともに、その研究を通して中国学術思想史や日本の東洋学との比較研究を進める必要があった。

2. 研究の目的

発展的研究課題として、以下の4点に取り組むことを目的とした。

(1) 『古史辨』派の研究実践に関する史料論的研究

既存の研究においては、顧頡剛らの方法論と学説の結論に主に注意が払われていた。本研究では、学者が用いている文献に視点を置き、学説が生み出されるプロセスを詳しく検討することにより、結果としての学説に注目するのみならず、いわばその舞台裏まで分析を及ぼす。

(2) 疑古史学と同時代の日本・西洋の史学との関わり

顧頡剛による疑古の提唱は、白鳥庫吉の所謂「堯舜禹抹殺論」が来源ではないか、という推定が、数十年来断続的に示されてきた。また、早くから、顧の層累説(時代が後になればなるほど、語られる古代史は溯っていく)と内藤湖南の説の相同性が注目されていた。疑古を「堯舜禹抹殺論」と重ねる見方の背後には、戦前日本の東洋史研究を、中国への優越意識に基づく帝国主義的学説と断じた上で、疑古を反民族主義的思想として批判する意図がある。これら推定はなされているものの、実際に顧や日本の中国史家の研究を詳しく跡付けて、その考証の進め方の異同を具体的に比較対照した研究はなお存在しない。上記(1)の研究を基礎として、各学者の学説及び史料の扱い方を対照させ、この懸念に一定の結論を得る。

また、西洋における歴史学の展開と疑古史学の関連についても、検討を要する。聖書の記述と歴史との関係、聖書考古学の進展といったテーマと、中国の疑古の動向の間に、いかなる異同があるか、また場合によっては影響関係が見られるのか、といった問題がある。

これらを通じて、『古史辨』や疑古史学を、中国内で完結した学術動向として捉えるのではなく、より広い視野から位置付けることを目指した。

(3) 疑古史学と近代以前における中国の辨偽との関わり

顧頡剛やその師の胡適(1891-1962)は、自ら清朝考証学からの方法的影響を語っており、実際に崔述(1740-1816)の『考信録』を重視し、顧は『崔東壁遺書』を整理刊行した。この点で、疑古史学と近代以前の辨偽、とりわけ清朝考証学との関係は明らかである。ただ、やはりこれまでの研究では顧・胡の方法論や、自己言及に基づいて清朝考証学の影響を語る傾向が強く、実際の研究過程においていかなる異同があったのかという問題については、十分検討されていない。(1)と同様の方法によって、主に顧の古史説と近代以前の古史説を比較したい。

また、在世中から無名であった崔述は、明治日本で那珂通世により『崔東壁先生遺書』が標点出版されたことから、注目を集めるようになっていった。それは胡や顧が崔述に注目する20年ほど前のことであり、ここでも(2)と同様、日本との関係が問題になる。(2)を踏まえて、このテーマについても検討する必要がある。

(4) 顧頡剛の最終的な研究成果としての尚書研究の跡付け

顧の史学は、最初過激な懐疑から始まり、最終的には王国維(1877-1927)の研究方法をも総合し、尚書研究において大きな成果を残したとされる。顧の尚書研究は晩年の助手であった劉起野(1917-2012)に引き継がれ、2005年には劉との共著の形で『尚書校釈記

論』として出版された。『顧頡剛全集』には、これまで未刊であった1920～60年代にかけての顧の尚書研究関連の講義・原稿も収録されており、これら新出の著作を、既出の著作及び『顧頡剛讀書筆記』等と合わせて検討し、顧・劉の尚書研究の展開を跡付けることによって、『古史辨』派史学の到達点を見極めたい。

以上により、『古史辨』派・疑古史学を同時代の他地域における史学との関係、及び近代以前の中国學術との関係において位置付けることを、全体の目的とする。

3. 研究の方法

研究目的(1)～(4)について、研究期間に合わせ、それぞれ1年ずつ取り組み、合わせて成果を発表していく計画とした。

具体的な研究方法としては、次の各点が挙げられる。

(1) 遡源の方法

1. 及び2.(1)でも述べたように、従来の研究では、顧頡剛らの学説を所与の前提として、その整理や意義付けを行うことが主であった。それに対して本研究では、顧らの学説がどのような根拠に基づいて構成されているのか、形成の過程はいかなるものか、といった観点から分析を深めることを目指した。学説から、その由来を溯って行こうとしたものである。由来としては、内在的な部分と外在的な部分がある。前者としては、顧の『日記』や『讀書筆記』など、著作以前の史料を詳細に跡づけて、学説の形成過程やそれぞれの時点の論理、構想を明らかにしていく。また、各時点で扱われている史料に立ち戻って、何が注目され何が捨象されたか、また、「誤解」はないか、といった問題を見ていく。外在的な部分としては、端的には日本からの「影響」の有無といった問題があり、学説が形成される過程で、他者や學術環境からの作用を明らかにしていく。こうした方法は、上記2.(1)～(4)すべてに通底するものである。

(2) 新史料の活用

上記の通り、『顧頡剛全集』の刊行は、『古史辨』派・疑古派の領袖であった顧頡剛の研究に対し、大きなインパクトとなった。顧の著作の整理は長い時間をかけて進められ、断続的に刊行されてきた。『古史論文集』の一部、『民俗論文集』の一部、『日記』の全体、『讀書筆記』の大半は、既公刊のものである。他方、『古史論文集』の尚書関連原稿、『書信集』のほぼ全体、『文存』の多く、『清代著述考』の大半など、新出の史料も多い。本研究では、2.(1)～(4)の研究を進めるにあたり、これら新出史料を活用することとした。

(3) 複数の時代・地域にわたる資料収集

本研究の目的は、従来の『古史辨』派研究に対してさらに広い視野で研究を進めようとするものであるから、それに応じて扱う資料の範囲も拡大することになる。2.(1)については顧が着目した史料、2.(2)については同時代の日本や西洋における史学関連の資料、2.(3)については清代を中心とする學術史関連資料、2.(4)については尚書学関連の資料がある。これらは膨大な範囲にわたり、すべてを網羅することはできないが、本研究課題の関心に沿って、国内、北京、台北等で収集に努め、適宜研究成果に反映させた。また、これら資料は今後さらに研究を展開させる上での基礎ともなるものである。

4. 研究成果

5. に挙げる通り、雑誌論文3件、学会発表3件、図書1件の成果が現在までに出ている。それぞれについて概略を述べる。

雑誌論文 及び学会発表 ……顧の疑古の出発点である『古史辨』第一冊所収の書信・論文において、『詩経』『尚書』『論語』の成書年代が仮説の出発点として重視されており、なかでも『詩経』の一部を最初期の史料として認定することから、顧の仮説が出発していることを指摘した。顧が『詩経』を重視したのは、胡適からの直接の影響のほかに、民俗学的な視点も関与していると考えられる。ただ、胡は欧米東洋学の天文に関する学説に基づいて『詩経』の成書年代を推定したが、顧は天文については言及していなかった。

雑誌論文 及び学会発表 ……顧頡剛の主に初期の学説と、白鳥庫吉のいわゆる「堯舜禹抹殺説」、富永仲基の加上説に着想を得た内藤湖南の「『尚書』編次考」および中国上古史講義とを比較した。白鳥と内藤の所説は大きく異なるが、ともに顧の立論とも異なっており、明白な影響関係は見出しがたいと考えられる。従来懸案であった顧頡剛の疑古学説と日本の学説の関係について、論者の学説とその論理に即した比較を行うことで、日本と中国とで同時代的に進行した中国古代史研究に関し、着実な研究方法・結果を提示した。

雑誌論文 ……近代中国の疑古派が打ち出した学説と日本の學術動向との関係という問題関心から、崔述につき、20世紀初頭の日本で注目を集めたことと、中国での注目との関係について考察した。『顧頡剛全集』で初めて全貌が明らかになった顧の『清代著述考』が依拠した文献を探ることで、顧の崔述に関する知識が清末国粹派の劉師培に由来することが判明した。劉の「崔述伝」では確かに那珂通世による『崔東壁先生遺書』校点に言及しているため、顧はその事実を『清代著述考』作成時点で知ったはずだが、特に注意を払わなかったらしい、と考えられる。

学会発表 ……顧は『詩経』を重視するところから古史論を始めたが、1920年代後半にかけてまとまった上古史文献として『尚

書』に傾注していった。1950年代以降は訳注作成に取り組み、1960年代以降は劉起釔と共に研究を進めた。今文『尚書』の訳注は1999年に劉起釔によって完成され、2005年に『尚書校釈訳論』として刊行された。本発表では、以上50年以上にわたる顧の『尚書』研究の経緯とその方法について、『顧頡剛全集』刊行により初めて公刊された史料も用いながら跡づけ、合わせて顧と劉の論を比較検討し、さらに顧の『尚書』研究の学術史的意味について述べた。

図書……当該書は近代東アジアの知識人の小伝集であり、顧頡剛の伝記を執筆した。本研究の成果を生かしつつ、顧の生涯と業績、その意味についてまとめた。

これらにより、本研究の所期の目的・計画をおおむね達成することができた。本研究は、『古史辨』派・疑古派及び顧頡剛研究の従来懸案を一定程度解決し、新しい視角によって発展させたものである。また、時代・地域をまたがる視点に立って研究を進めたことから、今後の研究テーマを拡張していくことが期待できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

竹元規人，崔述の「再発見」と顧頡剛 - 近代における清代学術評価の問題をめぐって - ，福岡教育大学国語科研究論集，査読有，56巻，2015年，59-74頁

竹元規人，顧頡剛の疑古学説と同時代日本の諸説との比較，九州中国学会報，査読有，52巻，2014年，61-75頁

竹元規人，顧頡剛の疑古学説に対する史料論的検討，九州中国学会報，査読有，51巻，2013年，106-120頁

〔学会発表〕(計 3件)

竹元規人，顧頡剛の尚書研究の方法と経緯に関する考察，九州中国学会大会，2015年5月17日，九州大学椎木講堂(福岡県・福岡市)

竹元規人，顧頡剛の疑古学説と同時代日本の諸説との比較，九州中国学会大会，2013年5月12日，琉球大学法文学部(沖縄県・西原町)

竹元規人，顧頡剛の疑古学説に対する史料論的検討，九州中国学会大会，2012年5月13日，福岡教育大学教育学部(福岡県・宗像市)

〔図書〕(計 1件)

趙景達ほか，有志舎，講座東アジアの知識人3「社会」の発見と変容，2013年，viii,362(202-218)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹元 規人 (TAKEMOTO, Norihito)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80452704